

「香紙切」の特質

高城 弘 一（竹苞）

一. はじめに

日展や読売書法展などの書展において、かな作品を見て回ると、特に細字作品の場合、背景には何らかの古筆の匂いがある。最近はどうも、「小島切」「香紙切」などの細身のかな古筆や伝西行筆系のかな古筆が隆盛を極めてきているようである。中でも「香紙切」には人気があるらしく、このかな古筆を基調とした作品がずいぶんと見られる傾向にある。

「香紙切」の筆者は、一般的に三十六歌仙の一人で女流歌人の小大君に充てられている。なるほど一般的な「香紙切」の細身で流麗な筆跡は、女筆に充てられるのにふさわしい。しかし、江戸時代の古筆鑑定家・古筆見の鑑定によると、意外と多くの断簡に藤原公任筆となっている極札（簡便な鑑定書）が付随しているのが見受けられる。中には、三蹟の一人である藤原佐理や同じく藤原行成と充てられている極札も確認している。

書写内容は、平安時代の散逸私撰集『麗花集』という歌集である。わが国第四番目の勅撰和歌集『後拾遺和歌集』の序に、「うるはしきはなのしふ」という歌集が登場する。まさに、この『麗花集』を指したのである。今日では、たとえ江戸時代における、完全な写本すら一本もなく、伝小野道風筆「八幡切」とともに断簡が知られるだけである。断簡が一葉でも多く見つければ、全体像がよりおぼろげながらも見えてくるというものだし、どの作者のどんな歌が入っていたのかということも判明してくるので、殊に国文学の世界において、この種の断簡拾遺はたいへん重要なことである。

二. 架蔵「香紙切」

数年前に神田の古書肆で、『濱千鳥』という手鑑を見せてもらう機会があった。伝藤原家隆筆「新古今和歌集切」四半二葉分に目がとまる。あとはあまり興味のなかったが、その手鑑が丸ごとだと結構な値段になるので、そのまま売れなければ、崩してくれろという。折角だから、伝藤原家隆筆「新古今和歌集切」と手鑑帖とその左脇に押しであり虫喰いが多く、傷みの甚だしい歌切【図1参照】もついでにもらうことにした。これには、藤原公任という極札（大倉好齋の

極め、伝家隆筆切も同様）を伴っている。一瞥したところ、この伝公任筆切はどういう古筆切なのか判然としない。他所収する古筆切の内容からして、あまり期待するのはどうかとも思ったが……。古書肆のご主人は、鎌倉時代の何かの写しではないかとの意見だったが、何となく王朝の匂いがしたものだから、手鑑が丸ごと売買できなかつたことをこれ幸いに、三点セットで譲ってもらえることになった。

ところが、この伝公任筆切は、『新編国歌大観』をいくら調べても、その歌集が何であるか判明しない。大方の歌集は、この索引を駆使して内容を明らかにする。しばらく途方に暮れていたが、料紙の虫損や傷み具合を調べてみると、何とこれが新出の「香紙切」（第二種）だったのである。『麗花集』なら『新編国歌大観』にも収録されているが、これはあくまでも刊行時点で拾遺した「香紙切」なり、「八幡切」の本文を翻刻したのに過ぎない。新出の断簡となれば、本文が収められていなくて当然であろう。

本文は、以下の通りである（／は改行の位置。解釈によって濁点を付ける。以下同様）。

にあまのふね□□りた□□□□／さい院／ゑみながらそでうちぬらすあま□□／の□は□れたる我□□と思へば／四
条の宮ゑにしほがまかき□□いにしへのあまやけぶりになりに□□

「香紙切」ならば平素から見慣れているし、最も好きな古筆の一つである。鑑定し損なうはずはないと思ったが、やはり一瞥した時点ではわからなかつたのが事実である。「香紙切」（第一種）の細くしなやかで、伸び伸びとした流麗な線、自由奔放な結体、これらがまるでない。しかし、これでも立派な「香紙切」である。結局のところ、「香紙切」には何種類かの書風が併存しているといえよう。イメージにあるのは、あくまでも「香紙切」の一部に過ぎなかつたということになる。最も現存数が多く見慣れている「香紙切」を第一種とし、次に多いものを第二種としておこう。

三、「香紙切」第一種・第二種

学書の上で、古典の臨書は不可欠である。かな書の場合、頂点を極めた平安朝の古筆に、その範を求めるのが常道であろう。中級者以上となると、「香紙切」もその撰に漏れることはない。特に「香紙切」は、近年好んで学書の対象となっている古筆である。ところが、一冊の「香紙切」影印本を通して臨書をすると、どうしても臨書したくない箇所が出てくるといふ人がいる。いったい、それはなぜだろうか。

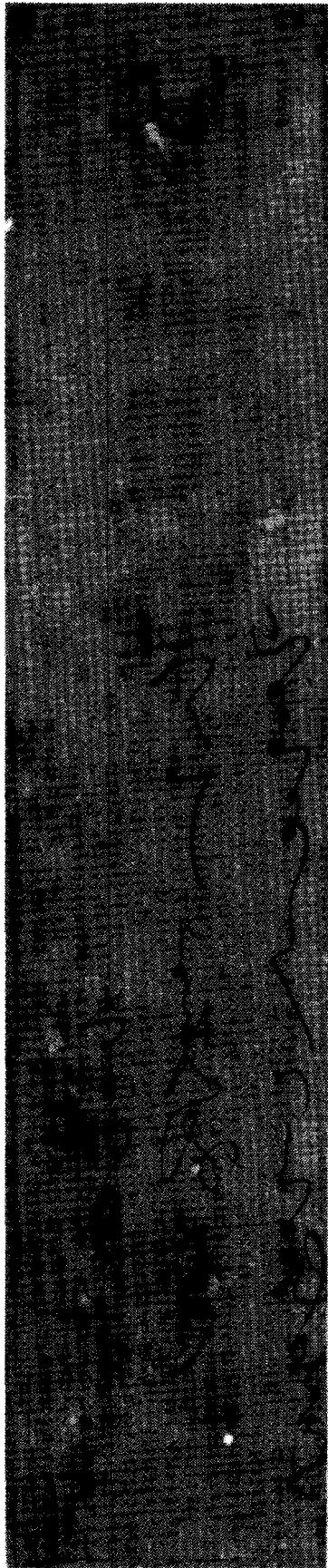
縁あって「香紙切」第二種を落手してからというもの、「香紙切」の筆跡に関して疑問が湧き上がり、その研究がはじまつた。今までは、漫然と一様に眺めていた「香紙切」であつたが、「香紙切」には何種類かの書風があるということが

図1. 「香紙切」第二種 筆者蔵

(一七・二X一〇・〇cm、極札を除く)



図2. 「香紙切」第一種 筆者蔵



(二〇・九×四・四cm)

判明した。そこで、大きく二つに分類したのが「香紙切」第一種と第二種である。研究の成果により、「香紙切」第一種と第二種との違いをここに明確にしておきたい。

まずは、一般的に馴染みのある「香紙切」第一種の特徴を掲げる。

・細線を十分に利かせ、料紙を滑らせるように、自由奔放に筆先を駆使している。

・縦へも横へも動きが大きく、小気味よいリズムを醸し出している。

・行の揺れが大きいので、行間が狭い。

・墨色の濃淡をうまく使い、いわゆる渴筆はあまり多くはない。

・本文の詞書は、比較的下の方から書きはじめている。

次に、一般的には馴染みの薄い「香紙切」第二種の特徴について述べよう。

・一文字一文字しっかりと書き、行の縦への流れは通っているものの、横への動きが小さいので、行間がゆったりしている。

・墨がなくなってくると、筆圧を加えていき渴筆を多用する。

・本文の詞書は、比較的上の方から書きはじめている。

・渴筆に加筆の上、増墨している箇所が存する場合がある。

このように「香紙切」第一種と第二種とでは、書写形式はもとより、書風や線質などの相違が明瞭である。これは、視覚的に判定が可能であろう。ちなみに、現存する「香紙切」八十数葉のほとんどが第一種であり、第二種はわずか九葉ほどしか確認していない。

さて、「香紙切」第一種と第二種とでは、字形がずいぶん異なるものもあるし、使用されている文字においてもそれぞれ嗜好性が見られる。前者は、鑑賞眼によって人それぞれ判定に差が出るかもしれないが、後者については、データによつて一目瞭然のはずだろうから、具体的事例をいくつか挙げて確認してみよう。例えば、書写された本文に、「の」は数え切れないほど頻出するが、第一種は平仮名の「の」だけを使用し、第二種ではそれに加え、「能」の変体仮名も十数ヶ所で使用している。「も」は全体で百数十ヶ所も出てくるが、第二種で五例ほど使用されている変体仮名「裳」が、第一種ではまったく使用されていない。ほんの二例を挙げたのに過ぎないが、それぞれ数少ない第二種にこれだけあり、数多い第一種にまったくないのだから、「香紙切」第一種と第二種との格段な相違というのは、一人個人内の表現領域の範疇を明らかに越えるものである。第一種と第二種とは、明かに別人の手にかかるものなのだと断言できよう。

「香紙切」第二種を架蔵していたのであるが、まさに「類は友を呼ぶ」といおうか、時を経ずして「香紙切」第一種も落手することになった【図2参照】。これは、詞書・詠者名のわずか三分分に過ぎないが、立派な「香紙切」第一種である。本文は、以下の通りである。

山里にてうぐひすを／き、てよめるなり／なかつかさ

これで、「香紙切」第一種と第二種とを間近で見られるのだから、鬼に金棒、ますます研究に拍車がかかることになる。ここまでくれば、前段の解答が出たかと思う。腕に確かな人は、反射的に「香紙切」第一種と第二種（第三種以下を含む）とに分別していたのである。一般的には、大胆で流麗な「香紙切」第一種が好まれているのが現状であるといえよう。

四 「香紙切」第三種

「香紙切」には、いくつかの書風が併存しているということを述べてきた。「香紙切」第一種と第二種とは、諸条件において明らかに異なる。間仕切りによって、区切ることが可能であろう。これから述べようとする「香紙切」第三種は、「香紙切」筆跡研究の初期段階においては、第一種と認定していたものである。通常の「香紙切」第一種とは、どこことなく雰囲気異なるのかなとうすうす感じてはいたが、これはあくまでも第一種筆者の個人の書表現範疇内とし、あえて深くは追求しなかったのである。ところが、本腰を入れて考察してみるとどうであろう、まったくの別枠で考える必要性が出てきたのである。

現在のところ、「香紙切」第三種は、わずか二葉しか確認できない。一葉は、個人蔵の古筆手鑑『梅の露』所収のもので、もう一葉は、MOA美術館蔵の古筆手鑑『翰墨城』（国宝）に存する。それぞれ、仮にA・Bとしておこう。一面を通じての、「香紙切」第三種A・Bの印象はどうであろうか。ここで「香紙切」第三種A・Bの特徴を掲げておこう。

- ・ 第一種と比較すると、線にキレがない。
- ・ 全面的に弱々しい印象を受ける。
- ・ Aは一文字一文字を構築し、それをところどころ連綿させたといった感じである。
- ・ Bはどこどころ動きが大きくなり、Aに比して縦への変化が見られるが、不必要に長く伸ばしたことにより、これが紙面下方での、頻繁な行分けになってしまった。
- ・ 行における中心線が、左へ流れる傾向にある。
- ・ 第一種に見られるような変幻自在の妙が感じられない。

以上のように、これだけでも「香紙切」第一種とはまったくの別筆だといえる。更に、筆跡分類の方法として極めて有効な、使用仮名の嗜好性とその頻度についても、第一種と比較検討してみたい。特に、格差が顕著な事例を掲げてみたい。

・「新(し)」や変体仮名「乃(の)」は、第三種A・Bとも各一例ずつ、「無(む)」は、第三種Aで一例を確認できるが、第一種では、三字ともまったく使用されていない。

・「楚(そ)」は、第三種Bに二例も確認できるが、第一種ではたったの二例である。形状がまったく異なるが、これはむしろ第三種の方が良い形ではないかと思う。

・「帝(て)」は、第三種Bにたったの一例確認できるが、第一種はもとより他の各種筆跡でも使用されていない。

・「飛(ひ)」は、第三種Bにたったの一例確認できる。第一種でも五例拾遺できるが、より簡略化された方の形であり、第三種のように複雑ではない。

・「類(る)」は、第三種での使用頻度が高く、Aで二例、Bで一例、都合三例を確認できるが、第一種ではたったの二例である。形状が異なるのは、他と同様である。

・「越(を)」は、第三種A・Bとも各一例ずつ、第一種では三例を確認できる。戈のタスキと最終の点との関係が明確に異なる。

以上、「香紙切」第三種は第一種と比べて、異質であるということを経々証明したつもりである。これでも「香紙切」第三種と第一種とは同筆といえるのであろうか。

「香紙切」第三種Bにある「あしひきの」の連綿や構成がよほど気に入っているのか、展覧会に見る、「香紙切」を基調とした作品では、あえて「あしひきの」を含む和歌を選出し、ここの部分をそのまま使用している。そんな作品に、近頃何回も出くわした。他の本文は、「香紙切」第一種だったり、第二種から拾ったり……。果たして、これで統一性のある、バランスのとれた作品制作は可能なのだろうか。

五. 「香紙切」第四種

「香紙切」には、第一種から第三種までの書風が併存しているということを書いてきた。これから述べようとする「香紙切」第四種は、現段階でわずかに一葉しか確認することができず、極めて特異な断簡である。

次項では第五種について述べるが、その第五種は第一種の一部を構成するものなので、仮にこれを除くとしても、第一種から第四種までは、もとは同一の本か、あるいは別の本かという点が問題となろう。ほとんどの縦寸法が二十一センチ

メートル前後である。ただし、横寸法の方は約十二センチメートルを基準とするが、中には見開きや、呼継ぎをしたものと推定される断簡もあり、極端に幅が広いものも散見される。また、和歌を中心にして重複がまったく見られない。ちなみに、『麗花集』を書写内容とする伝小野道風筆「八幡切」は、今日二十葉ほどしか確認されていないが、「香紙切」と比較すると、詞書だけのものも含めると実に十六首分も重複し、一方では、断簡の寸法がまったく異なる。したがって、『香紙切麗花集』と『八幡切麗花集』とは、別の本といえよう。逆に、第一種から第四種までは、もとは同一の本であったということが出来る。

「香紙切」料紙の大半は斐紙（雁皮紙）質であるが、中には楮紙質のように見えるものもある。「香紙切」では、いろいろな紙質、少なくとも斐紙質と楮紙質との二種類が混用されていたことになるまいか。また、紙の染め具合は、かなり色相の濃いものから淡いものまで、中には素紙と思しきものも混交されている。このように同一の本における料紙の混交は、何もこの「香紙切」に限ったものではなく、まとまった形状の冊子本や卷子本の古筆にも事例がある。仮に異なる紙質のものが混交しようとも、同一の本か別の本かを判定する材料とはならないのである。

「香紙切」第四種は、一面を一瞥しただけでも、前半三行の漢字群は重厚な筆致で、悪くいえば固さが見られる。和歌の二行に関しても、第一種のようなキレイや変幻自在の妙が見られない。とまれ、これは巻頭だから仕方のないものだと割り引いて考えても、どうも今一つ腑に落ちない。ここで、「香紙切」第四種の顕著な特徴を見ておこう。

・「す」は二回出てくるが、両方とも「須（す）」を用いている。第一種ではほとんど平仮名の「す」で、「春（す）」や「数（す）」を数例ずつ用いている。

・「耳（に）」は、第一種から第四種まで各種の筆跡に及ぶ。第四種の一例は、第一画目の横画が極端に長く張り出して
いる。

・「里（り）」は、第一種から第四種までこの一例しか確認できず、もともと特異な文字使用といえる。

・漢字「春」は、この第四種と第一種で見られる。第四種の二例では、左払いと右払いとは繋げていない。第一種ではそれらを繋げ、かなり右上がりになっている。それに伴い、「日」を中心からやや右に据えて、バランスをとっている。

以上のように、これだけでも「香紙切」第一種とはまったくの別筆だといえる。今日、藤原俊成や定家の関わった書写本に、巻頭の数行は俊成や定家自らが染筆し、残りの大半は別筆という事例がいくつもある。この別筆部分は、周辺の者に書写させたということが推測される。「香紙切」では第一種の女性的な筆跡に比べ、第四種の筆跡は男性的なものを想像させるのに十分である。この「香紙切」巻頭は、『香紙切麗花集』の書写を企画した当事者の某男性の筆跡ということ

ができまいか。ちなみに、本文のみ以下に掲げておく。

麗花集第一／春上／柿本人丸／昨日こそとしはくれしか春／がすみかすがの山にはやたちに／けり

「香紙切」第三種（東京美術書院刊『まつかぜ』所収）

六、「香紙切」第五種

サンリツ服部美術館所蔵「香紙切」【図3参照】は一面八行であるが、最後の二行に違和感を覚えないだろうか。本文は、以下の通りである。

まへのいづみを見て秋のち／かければ 中つかさ／したくる水にあきこそかよふらし／むすぶいづみのてさへすゞ
しき／麗花集巻第四／秋上／摂津守任はて、のほりける七月ついたちこ／ろに天王寺別当せいがつかはしける

文字は小粒だし、行は極端に左に流れている。この書風は、前半四行の第一種の流麗な筆跡とはまったく性質を異にする。仮名を比較しても、明らかに別筆であるのには何ら疑う余地がない。書風は、藤原定信や藤原定家などの筆跡を彷彿とさせる。この二行内では、筆脈や行の流れからして明らかに一筆であろう。

この部分で漢字の筆跡に注目していきたいと思う。「任」の横画では、入筆で打ち込みを強くせずに、徐々に筆圧を加えていく。収筆では筆をかなり開いた状態で押さえ、そして紙面から筆を離している。実は、この横画の筆法はこの行の直前、「麗花集巻第四 秋上」の横画とびたりと一致するではないか。他の筆法を確認しても、共通点がかなり多い。従って、後半四行分がすべて同一人物による筆跡ということになろう。

従来、一般的な認識では、第一種の筆者が集名（『麗花集』）・巻次・部立を書写していると思われる。稿者などは、第一種の筆者は複雑な漢字はあまり上手とはいえないとさえしていた。これらはすべて誤認であったのである。とまれ、今まで第一種と思われる一面の中に、別筆が混在していたのである。このような筆跡を第五種と認定しておきたい。

集名（『麗花集』）・巻次・部立の箇所注目するならば、「麗花集第一 春上」は第四種で、「麗花集巻第十 雑」は第二種のままでもよい。「麗花集巻第四 秋上」の他に、「麗花集巻第五 秋下」「麗花集巻第六 冬」「麗花集巻第七 恋上」の都合四例はびたりと一致するので、第五種と認定してよいだろう。精査の結果、この第五種の筆跡は、その他では詞書全体・詞書の一部・詠者名全体・詠者名の一部・詞書と詠者名に見ることができた。すなわち、和歌のところでは全体・部分を問わず、一切見られない。また、一部の例外を除き、複雑な漢字が含まれている語句に限られているということも特筆できよう。これはいかなることであろうか。第一種の筆者は、複雑な漢字を書くことができない、もしくは苦手にし

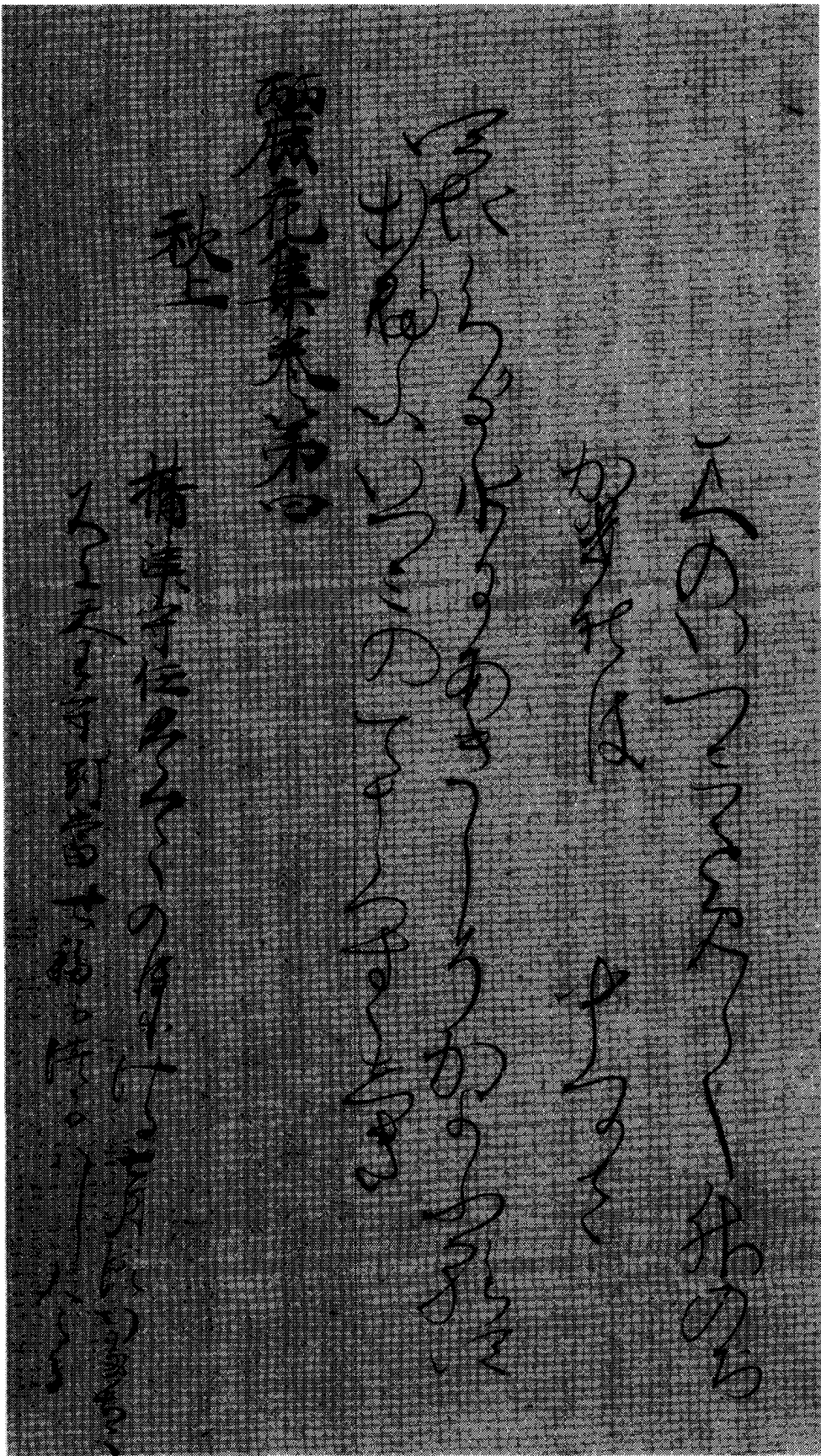


図3. 「香紙切」第一種(前半四行) 第五種(後半四行) サンリツ服部美術館所蔵 (二〇・八×一一・六cm)

ていた。または、何らかの事情で、仮に書いてもあえて書かずに抜かして書き進んでいった。ただし、後で第五種の筆者に書き加えてもらうべく、余白または行間を設けておいたのである。そして第五種の筆者が最終的に補填をしていった、という自説を持っている。

このような事例は、他の古筆でも存在する。「本願寺三十六人家集」は、白河法皇の六十御賀の後宴に贈物とされた。その中の『躬恒集』は、藤原道子の筆になるということとは、古筆学においてほぼ定説化されている。この時は、天永三年（一一二二年）、道子七十一歳の筆ということになる。この『躬恒集』にも、詞書全体もしくはその一部で、明らかに別筆の存在が確認でき、その別筆は男性的なものを想像させる。

また、冷泉家時雨亭文庫所蔵『中御門大納言殿集』には三種類の書風が混在し、一冊の枳形本として伝存している。ちなみに『中御門大納言殿集』B筆は、『三位中将公衡卿詠』・『小大君集』（以上、冷泉家時雨亭文庫所蔵）・『中務集』（出光美術館所蔵）・『山家心中集』（個人蔵）第一種などと同筆である。『中御門大納言殿集』はA筆・B筆と大別できるが、歌題等漢字が含まれる肝心な箇所は、藤原俊成の自らの染筆である。俊成管理下で、周辺の女性A筆・B筆に書写させているということになるか。

七. おわりに

以上、いろいろな観点から「香紙切」を見てきた。

「香紙切麗花集」という本には、少なくとも第一種から第四種までの書風が併存した、広義の「寄合書」といえる。第五種は補筆ともいえるもので、第一種の一部を構成し、極めて特異な位置付けといえよう。今後、「香紙切」を鑑賞するばかりではなく、学書の対象としたりする場合でも、異書風の混在ということを是非認識しておいてもらえればと思う。

本拙稿は、『美じょん新報』（ビジョン企画出版社発行）の「古筆、名筆を観る 『香紙切』」のコーナーにおいて、第二十九号（平成十四年二月）から第三十三号（平成十四年六月）まで五回にわたって連載された拙稿を元に、多少の改変をし、再構成したものである。

実は、近時（平成十四年十二月二十四日）閲覧させていただいた未調査の手鑑一帖の中に、「香紙切」が二葉も収録されていた。それも、「香紙切」第一種（小大君という極札付き）と「香紙切」第二種（佐理卿という極札付き）とが併存していた事実を突き止めた。同一鑑定者による極札で、書風の相違により筆者を別にしてしているのである。誠に、驚嘆すべきことといえよう。この件に関しては、いずれ稿を改め、何らかの機会に発表したいと思う。